劉歆、字は子駿。後に秀と改名し、字を穎叔とした。成帝期に父劉向と共に宮中の蔵書の校定に従事し、あらゆる学術に通じた。哀帝期、劉向の死後も、王莽の推挙により取り立てられて五経の領校を継続・完成し、更に目録『七略』を著した。また、『左伝』『毛詩』『古文尚書』を学官に立てようとし、太常博士に書簡を送って責めたが、失敗。平帝期になると中塁校尉、更には羲和官に任命され、権勢を更に強める王莽と共に郊祀・明堂・辟雍の整備に努め、紅休侯に封ぜられた。更に律暦を校定し、『三統暦』『三統暦譜』を著した。王莽が即位すると、国師・嘉新公とされ、様々な改革に従事したが、新末の動乱期に新朝転覆を謀ったのが露見し、自殺した。

劉歆の業績もまた、父劉向に劣らず多岐に亘り、後世に大きな影響を及ぼした。とりわけ、中国史上最初の目録とされる『七略』の執筆と、『左伝』や『古文尚書』といった古文経典の顕彰は、その後の学術の方向性を決めた。ただ、本研究はそれらには焦点を置かず、専ら五行や易の位置付けといった側面から、劉歆の思想を考察する。